

目次

はじめに……………	田中広明	1
総論―地域史の新しい視点―……………	田中広明	5
第1部 仏教勢力の浸透と開発		
下野国河内・都賀郡の地域開発……………	山口耕一	17
―多功南原遺跡を中心に―		
寺院・郡衙と地域開発―上野国佐位郡の事例から―……………	出浦崇	39
窯業生産地と古代の仏教……………	澤口和正	59
神仏と山川藪沢の開発―鎌倉郡沼濱郷―……………	依田亮一	77
古代東国の寺領庄園……………	荒井秀規	95
第2部 集落の盛衰と開発の担い手		
古代の開発と地域の編成……………	田中広明	113

拠点集落の消長―常陸国河内郡嶋名郷……………清水哲 135

信濃国筑摩郡の変容、その主体者は誰か……………原明芳 151

―平安時代後期を中心に―

渡来人による新郡開発―武蔵国高麗郡……………富元久美子 167

班田制と土地開発……………北村安裕 185

第3部 生産力向上と地域の力

扇状地の開発と集落の展開……………齋藤秀樹 205

―甲斐国御勅使川扇状地を中心に―

官宮製鉄と地域開発……………藤木海 229

―陸奥国宇多郡・行方郡―

国府を支えた手工業生産―武蔵国府とその周辺……………鶴間正昭 249

集落の拡大と地域の開発―下総国印幡郡……………加藤貴之 273

あとがき……………天野努 295

新しい地域史を構築するには、十分すぎるほど考古学資料は蓄積されてきた。

高度経済成長期以降、列島各地で発掘調査が行われ、膨大な考古学資料が蓄積された。平野の拠点集落もあれば、中山間地の小集落や海辺の漁村まである。これらの遺跡は、新しい地域史に編み込まれることを心待ちにしている。なかでも、地域社会の秩序を維持し、発展させる原動力となった開発の歴史は、大地に残された人類の痕跡を研究対象とする考古学には、格好の研究分野といえよう。

そもそも「開発」には、①森林や荒地などを切り開いて田畑にすること、②開き始めること、③知識などを開き導くこと、④産業を興して天然資源を生活に役立つようにすること、⑤新しいものを考え出し、実用化すること、⑥児童の教育法などの意味がある『日本国語大辞典』小学館、一九七二、日本大辞典刊行会。考古学は、このうち①と④が対象となる。①は開拓や開墾による生産域の拡大、④は自然から資源を採取し、活用した手工業生産の展開が課題である。

具体的に①は、(a)国府や郡家、寺院、道路など行政や政治、経済を推進するために建設された建造物、(b)河川の移動や用排水路の掘削、堤防や橋梁、堰や樋管などの水利施設、(c)水田や桑、漆、畠など圃場の広域整備、(d)開発を担った人々がくらす集落などである。また、④は、(e)人々の暮らしや国家の施策を遂行させるため、山野河海に埋も

れた天然資源を採掘、伐採、採集して加工(手工業生産)を施し、自然の改変や破壊を伴う開発である。アプローチは、多様である。「開発」という目標は、どこからでも照準を合わせられる。

ところで、古代の東国という地域における「開発」の特色とは何だろう。まず、その社会が、わが国の律令と在地社会の規範に支えられていたこと、古墳時代社会と中世社会の狭間であること、畿内周辺地域と陸奥・出羽国の狭間であること、そして何よりもそこに古代の人々が生きていたことである。それは、奈良・平安時代という社会、経済、政治の枠組みの中で歩んだ東国の地域、そのものの歴史である。

この目的に沿って本書では、一四の論考を準備し、三部に編集した。もとより、地域開発史の全般を網羅したのも、概説を行ったのではない。地域を知り抜いた研究者たちが、これまでに蓄積した考古学資料を縦横無尽に活用して、新たな地域史を編んだのである。論考の展開や証明の過程は十人十色だが、その方向性は一致している。官衙や寺院、集落、手工業生産などの展開の中に新たな歴史的事実を掘り起こし、地域社会と古代国家、宗教、経済などの関係性を整理し、説明していくことである。

つぎに、各論考の視点を抄述しておく。

第一部は、「仏教勢力の浸透と開発」にかかわる論文をまとめた。

山口論文は、下野国河内郡、都賀郡の開発について、下野薬師寺と多功南原遺跡の検討を通じて、初期寺領庄園のありかたを明らかにした。七世紀代の大形古墳が集中する都賀郡と河内郡には、国府や国分寺、あるいは東国唯一の戒壇を設けた下野薬師寺などの施設群が集中する。多功南原遺跡は、複数の井戸を備えた「単位遺構群」で構成された集落であり、これらの遺跡群と有機的に変遷したことから、下野薬師寺の初期庄園的役割を果たしたとされる。荒井論文が検討する東国古代寺院の寺領庄園の実態を知る上で示唆に富む論考といえよう。

出浦論文は、上野国佐位郡の郡家、寺院、交通路にかかわる開発を丹念にトレースした。『倭名類聚抄』の記載郷

にそつて遺跡の展開を探り、官衙や集落の消長、寺院と仏教、水田や土器生産について検討し、二つの大きな画期を導き出す。一つは八世紀中頃、一つは八世紀末から九世紀前半。前者は、七世紀後半から続く古代国家の体制が確立、浸透した段階であり、郡家や古代寺院、古代交通路の整備が推進され一応の完成をみた段階である。ことに寺院と水路(幹線水路)が、「一連の計画のもとに造営」された具体例を明示した意義は大きい。なぜならば、国家や豪族たちの描いた地域整備計画が、発掘された遺跡の中で確認されたことは、長い荘園史研究で無かつたからである。

さらに、第二の画期については、弘仁地震からの復興に郡家の「法倉」である八角形倉庫の役割を論じた。そして、この地域の開発の推進者である郡領氏族の檜前部君氏と、古代仏教のかかわりについてまとめた。

澤口論文は、武蔵国北部の事例をあつかい窯業の展開と古代仏教のかかわりをまとめた。元来、公私共利の地である山野に七世紀後半以降、須恵器、製鉄、薪炭などの手工業生産と古代寺院が、急速に展開した。山野を侵食していく古代の開発に人々は、どのような意識をもっていたのかを探る。そして、開発者たちは、他の地域に出自をもつ人々や山林で修行に励んだ人々とする。山林は、手工業生産や農業生産に欠かせない豊富な森林資源を抱えて、その開発が、寺院の経済活動を支えた意義は大きい。

依田論文は、相模国沼濱郷の開発をあつかった。とくに、池子遺跡群で発見された豊富な木製品の未成品は、「沼濱」の谷に住む「山部」たちが、木製品の生産にかかわっていたことを明らかにされた。谷地の開発にあたり、いわゆる村落内寺院や仏教系遺物の出土などから谷地の開発には、神仏との古代的な深いかわりのあつたことを証明された。この点、澤口論文や鶴岡論文が参考となる。さらに、灌漑用水路やため池などを復元して谷地をめぐる農村の景観復元を行い、一連の開発史をまとめ上げた。そして、その開発の推進者を「新大領」となった郡領氏族とした。

荒井論文は、東国の寺領庄園について、事例ごとに評価と課題を列举され、「寺田」と寺領庄園が異なること、寺領庄園は、「寺院墾田」であることを強調された。なかでも、下野薬師寺と東国国分寺の「寺田」、上総国藻原庄にか

わかる開発について明らかにされた。前者は、山口論文や各地の国分寺とかかわる重要な視点である。たとえば、発掘調査によつて、瓦や遺構の変遷から国分寺の修理を行った契機や実態がわかっても、その経済的な裏付けは、こうした研究があつて初めて理解が進む。また、定額寺とその庄園を通して、寺院の土地集積を明らかにされた。出浦論文の上植木廃寺や十三宝塚遺跡と周辺地域の水田開発の検討に参考となる。

第二部は、「集落の盛衰と開発の担い手」について検討した。

田中論文は、①建郡と移住、②弘仁地震からの復興について検討した。①は武蔵国加美郡、上野国新田郡、②は武蔵国幡羅郡を検討した。①は出浦論文の第一の画期、②は第二の画期と対応する。

まず、七世紀後半から八世紀初めの立評は、古墳時代(孝徳朝)以前から続く地域や人々のまとまりを機械的にくつたのではなく、古代国家が進めた広汎な人口移動(移住)によつて、強引に進められたことがわかつた。しかも、移住元の地域には、他地域や隣接地域から人口の補填が図られ、生産力の低下を食い止める均衡施策のとられていたこともわかつた。そして、移住した人々は、農業開発の専門集団であり、王権を経済的に支えた屯倉(御宅)の「田部」や「御田部」であつた。

また、弘仁地震からの復興には、地域開発の核として拠点集落が営まれた。拠点集落の登場は、平安時代の大開墾時代を牽引し、関東地方では、九世紀後半から十世紀にかけて山野を問わず、未曾有の開発に突入したことを明らかにした。

清水論文は、常陸国河内郡の嶋名郷の分析である。二〇〇〇軒を超える竪穴住居跡の調査は、嶋名郷の拠点集落である熊の山遺跡に地域開発を牽引した「有力者」が、多数の班田農民とともにくらし集落の実態を明らかにした。同遺跡の中央に方形の区画(有力者層の居宅)が登場する八世紀前半は、古墳時代的な集落から脱却し、郷の一部を編成する古代的集落に移る大きな画期とする。この居宅の主は、農民や集落の再生をかけた水場の祭祀を執行し、嶋

名郷を統括する人物であったことは疑いない。こうした基礎作業の積み重ねが、地域の新たな歴史を少しずつ解明していくと信じていたい。

原論文は、信濃国筑摩郡開発を中心にまとめられた。国府の置かれた筑摩郡の開発には、二つの段階があり、①七世紀後半から九世紀中ごろ、②九世紀後半から十一世紀前半となる。①は古代の開発が開始され安定する段階、②はその後古代的開発が変動する段階である。こうした変化についてこれまでは、「有力者の経営手腕の優劣と労働力の流動化」に基づくとした。しかし、墓制の検討から②の段階に木棺墓に象徴される貴族が、地方の経営に積極的に乗り出したとする。地域の開発は、地域の人々の弛まぬ努力で結実したとする牧歌的な考えに警鐘を鳴らす。事実、古代の集落は、堅穴住居跡数の変化をみても流動的であること、班田農民に班給される田は変動すること、そして古代の農業経営はとても不安定であったことなどが傍証となる。

富元論文は、武蔵国高麗郡の建郡にかかわる開発を検討した。高麗郡は、高麗人の移住によって建郡となる。この歴史的事実を考古学的手法で論証する作業から論考は始まる。移住の痕跡を土器に求め、その時期が、『続日本紀』と一致するとする。つぎに、空闲地の開発と河川の渡河(古代交通路)が、高麗郡の開発にかかわるとする。

さらに、古墳時代に活用されなかつた空闲地に小規模水田を営んだ高麗人たちは、国分寺瓦や須恵器などの物資を武蔵国府へ搬送(貢納)する役割を担っていた。移住と建郡という点では、田中論文の東国から陸奥国への移住とかわる。七世紀後半から八世紀前半には、列島を東に西にと、人口の大流動が起こったことを示す。

北村論文では、班田制と土地の開発について、七世紀後半から八世紀前半の課題を明らかにされた。その前提として条里制的地割が、未成立であり、班田制は条里を前提としないことをあげる。そして、孝徳朝以降の国家による土地の班給にあたり、大化二年八月の詔を重視する。それは、『常陸国風土記』の行方郡の開発譚が、「耕地開発を目的とした灌漑施設の新設や開墾を促した政令」とされた。

その後、持統朝に始まる継続的な班田は、すでに農民が耕作していた土地、屯倉や田荘とされた土地、豪族が主体となつて孝徳朝に開発した土地などを対象としたとする。さらに、大宝令下の班田は、公田とかかわり農民の小経営と貴族、豪族、寺院などによる大土地経営など多様な開発が行われたとされた。

そして、人口の増加や荒廃田の拡大から口分田の不足が生じ、百万町歩の開墾計画や三世一身法、そして墾田永年私財法へ坂道を転がるように班田制は、衰退の道を突き進んだ。このような土地開発の歴史が、現実の遺跡の中にとのように表れるか、本書のなかで点検していただけたら幸いである。

第三部では、「生産力向上と地域の力」について検討した。

斎藤論文では、甲斐国巨麻郡の御勅使川扇状地について、詳細な地形や地勢の特質、遺跡の分布からその開発の歴史を明らかにした。八世紀前半から始まるこの地域の開発は、九世紀の初頭、集落は扇状部に進出し、集落数や竪穴建物数が急速に拡大する。そして、この一連の開発の歴史に八田牧や葛原親王の賜田とのかかわりを指摘する。

それまで、扇状地の扇端部、湧水点近くに立地していた集落が、九世紀以降、広域灌漑に本来不向きな扇状部に展開する。その背景に「牧」の開発があるとす。荒井論文が、牧の開発は、法の目をかいくぐる手段とするその実態、平安時代的な大土地経営を示していると言える。

藤本論文は、陸奥国宇多郡と行方郡に展開した鉄生産について論述した。古代の製鉄は、山野から天然資源を奪取し、自然を破壊する。丘陵斜面を利用した製鉄は、粘土や燃料を大量に採取するからである。製鉄炉の分析と変遷過程からこの地域の製鉄は、「官主導の技術移植による画期が存在する一方で、在地における技術の継承」が行われたとする。さらに平安時代に入ると、豪族の拠点に建立された寺院に山林の囲い込みと鉄生産への参入が進み、豪族たちは、手工業製品を媒介とした交易によって、私財の蓄積がさらに進んだとする。また、貞観津波の陥没と浸水を契機として、製鉄遺跡の内陸部への拡散を説明する。同地震により郡家の機能が低下したが、豪族の私宅や寺院などが、

行政の欠陥を補完したとする。田中論文や出浦論文でも取り上げた災害と復興にかかわる共通の論題である。

鶴間論文は、武蔵国府を支えた手工業生産について詳述した。まず、国府や国分寺の造営や整備にかかわる窯業生産が多摩丘陵で行われたとする。東国の須恵器生産は、平安時代に入ると南多摩窯を除き淘汰されるが、その供給先は、相模国や甲斐国に及んだ。また、平安時代、山野の開発に挑んだ人々は、手工業生産に軸足を置く生活にかかわり、鉄製品の需要が増したことから製鉄や鍛冶関連遺跡の増加につながったとする。さらに木工生産は、国府の木製品需要の増加とかかわり、丘陵開発が進展したとする。そして、武蔵と相模の国境付近の丘陵の遺跡を分析し、「利害対立よりも伝統的かつ恒常的な地域間交流が勝った」とした。多摩地域が、武蔵国府の盛衰とともにあり続けたことを蓄積された考古学資料で明快に解明された。

加藤論文は、下総国印旛郡について検討した。印旛郡は、国内最多の発掘調査が行われた地域であり、墨書土器も豊富である。印旛郡を印旛沼の南岸地域と西岸地域に分けて集落を分析し、七世紀から八世紀中葉までは南岸地域が優位だが、八世紀後半以降は西岸地域が、急激に規模を拡大していく。印旛郡以外の各地でこの点が、共通することが、本書によって確認することができ、北村論文の班田制の展開とかかわり興味深い。

また、その集落構造については、拠点集落の分析から集落内の中心的建物群が官人とかかわることを確認し、郡領氏族の「大生部直」の関与を示唆した。そして、高岡大山遺跡の分析から高崎川や印旛沼周辺の開発を大生部直が、積極的に主導したとした。

以上、それぞれの論文が、多様な「地域の開発」の解明に挑まれた。

さて、「地域の開発」にかかわり、本書であつかえなかったが、次のような課題も今後、議論すべき視点である。まず、土地の状況、開発の目的に合わせた労働用具の検討である。荒地を開墾する鋤や鍬、草や枝を払う鎌や鉞、

材木を切り出す斧などが、その目的や状況に応じてどのように変化したのか。山作りの集団と墾田開発の人々の労働用具に差異があるのか、その実態は明らかではない。

つぎに、開発といえど墾田だが、水田や畑の遺跡は各地で発見、増加したものの水利や灌漑にかかわる施設の検討は、意外と進んでいない。堰や樋管、池堤などの構造的な分析や型式学的検討である。とくに広域水田には、優れた測量技術が必要であった。幹線水路を開削するには、勾配や水量の調整、掘削の土量や雇工の賃料など、「算」に長けた人物が必要であった。それを発掘調査の実態資料で遡及した研究は、残念ながらない。

また、開発にかかわった集団の分析を進めるべきである。たとえば、中山間地の開発では、「山部」や「杣人」あるいは、「木工」「鋳物師」「鍛冶師」などの手工業生産者、俘囚の移配、渡来人の移住など集団の構成にかかわる分析である。

ところで、「開発」は、人々のくらしを豊かにし、生活の安全を保障し、利便性を高めたが、自然を蝕み、不均衡な破壊や打撃を与えた。古代には、開発が引き起こした自然破壊に基づく災害は、神仏の祟り、自然のしつぺ返しと考えられてきた。「古代東国の考古学」の第二巻であつた「災害と考古学」は、「開発」によって災害が増幅された実態をあからさまに示した。あわせて御覧いただきたい。

たとえば、信濃国を襲った仁和の洪水(仁和四年、八九九)は、中山間地の乱開発が、被害の拡大を招いた。それは、製鉄生産や牧の設置、薪炭や須恵器生産などで森林の部分的伐採が急速にすすみ、局所的な保水システムの喪失が、悪影響を与えたためと考えられる。また、上野国の赤城山南麓を襲った弘仁の地震(弘仁九年、八一八)では、やはり山麓の随所に集落を展開し、谷の奥深くまで水田を営み、製鉄や炭窯、須恵器などで森林を蝕んだため、地震の被害を増幅させ、山津波や土砂崩れなどが発生した。

さらに、山野の開発にかかわり、これまで取り上げにくかった古代の「公害」も大きな課題である。天然資源の獲

得、とくに鉱物資源は、毒性の強い化学物質を発生し人体を蝕む。たとえば、朱の生産には水銀が用いられ、ガラスや施釉陶器の生産には鉛が用いられる。銅や鉄の生産にも毒性の強い物質が発生する。鉱物資源の獲得や加工、地域に及ぼした影響についても検討していく必要があるだろう。

ところで、これらの「開発」は、国家や王臣、貴族、寺社などと深くかかわっており、そうした社会的関係を無視して行われることはなかった。たとえ、地域の人々が、自力で墾田を増やしても国家による承認を経なければ、隠没田として収公されてしまう。そもそも「開発(かいほつ)」が、寄進や買得の対義語であったことを考えると、理解しやすい。

このように「地域の開発」は、懐の深いテーマである。多岐にわたる課題(視点)を抱えている。現代の「開発」に よりたくさんの遺跡が失われたが、記録保存の図られた遺跡は、様々な情報を伝えてくれる。いまこそ、この情報の海に漕ぎ出し、縦横無尽に權を操り、新しい歴史を編みだそうではないか。